普段着のわたしたち

『八十亀ちゃんかんさつ日記』というマンガがあります。

名古屋を舞台にした名古屋なマンガなのですが、ついにアニメ化されました。テレビ愛知で毎週木曜の夜に放映されています。

主人公の八十亀ちゃんは名古屋市の観光文化交流特命大使にも選ばれました。

応援したろまい！！　征阿

楽しみにしていた新元号発表の時、サラダに使う玉ねぎをスライスしていました。官房長官が 10 分遅れで会見場に登場しテレビに目が行った一瞬、右親指をスライサーでしくじってしまいました。「令和」の文字を血だらけで見る羽目になりました。今も負傷したままこれを書いています。　俊徳丸

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

３月某日、東京は新橋駅構内で発見。今年６月に東京の日本科学未来館で催される「マンモス展」のポスター。ただただ個人的な意見ですが、「洒落てる～！」と思い、足を止めて見入ってしまいました。久々にポスターで感動しました。

「蘇るのですか」の方はマツコデラックスです。

この企画展、東京終了後は名古屋でも巡回展が行われるそうです。　訶梨帝母

この号の編集真っ只中に起きたのがパリのノートルダム大聖堂の火災。あえて例えれば、富士山が無くなった日本のようかな。

日本人が神道や佛教の影響下で育つように、フランス人を理解するにはキリスト教を外せません。

火災現場ではアヴェ・マリアの賛美歌が歌われ、「パリはもう元に戻らない」と嘆く人がいたようですが、フランスは国の威信に賭けて必ずや以前と同じような美しい姿に復元するでしょう。　迷走坊

本当は美智子さま

5 月 1 日、皇太子徳仁親王が即位され「令和」の時代が始まりました。ふと亡くなった母を思い出しました。母が生きていればこの日をどんなに喜んだことでしょう。とにかく私の母は皇太子さまが幼少の頃の「浩宮さま」からの大ファンでした。なにしろ私は浩宮さまと同じ昭和 35 年に生まれていますから。

そんな母は、私が床屋さんへ散髪に行く時には必ずついて来て、いや私が連れられて、「浩宮さまと同じ頭にしてね！」と言って店へ入って行きます。わざわざ自宅から離れた母お気に入りの店です。若い従業員が多くいる当時にしてはちょっとお洒落なお店です。私が散髪をしている間も店のお兄さんの後ろに立ち指示を出している姿が鏡に映っているのを覚えています。「前髪は切り過ぎないで眉毛ぎりぎりの所で止めてまっすぐに揃えて！」。それが毎回のことですからお兄さんも気の毒だと子供ながらにも感じていました。前髪を長くしていたから床屋さんへ行く頻度も多かったのでなおさらです。私は浩宮さまの「坊ちゃん刈」スタイルは好きではありませんでしたが、このお店には活気があって行くのは好きでした。

母の浩宮さま好きは髪型だけにとどまりませんでした。母はミシンを使いこなす人で、通勤帰りに岐阜駅前の問屋街で布を購入してはいろいろなものを手作りしていました。私が小学校へ着ていく服も母の手作りか職場の同僚のお子さんのお古でした。「手作り」と聞こえは良いですが、今から思うとそれは浩宮さまが通学されていた「学習院小学校の制服」風、モドキのものであったのではないかと思い出すと笑ってしまいます。たぶんテレビで放映されていた『皇室アルバム』などを参考にしたのでしょう。母にしたら力作だったことでしょう。当時、私の同級生の男子はみんな長ズボンをはいていました。私は学習院風の長めの半ズボンがどうしても嫌で、ある日母に直訴しました。すると母は、「東京へ行けば男の子はみんなそういう格好をしています。」と言いましたが、東京など行ったことが無い母の言葉はまったく説得力のないものでした。

私は小学 4 年生になる春から、一連の母の「浩宮さま風スタイル」から解放されました　…。

当時の母のように女性が外へ働きに行き男性と同じようにお給料を貰ってくることは特別な時代でしたし、田舎町でしたので周囲からも批判をされたこともあったようです。そんな時、民間から初めて皇太子妃になられた美智子さまはご公務や子育てでその軋轢に対しとてもご苦労をされました。母は美智子さまをお手本にしていたと感じます。母に代わり、「本当にお疲れさまでございました」と心から申しあげたいです。　俊徳丸

令和

今年は改元が行われ、五月一日から平成に代わって令和になります。令和元年の始まりです。

キリッとした響きを持つ「令和」ですが、好感を持って受け入れられたようで、この案を推した政府はほっとしているとの報道がなされました。もっとも、響きとなると人それぞれ、一律ではありません。

キリッとしたという思いを抱くのは、つくりに令を持つ冷の字と重ね合わせるという、全く個人的な印象によるもので、もしも、賢いという意味を持つ、玲、怜、伶などの文字と結びつける人がいれば、印象は変わったものになります。法令、命令などと重ね合わせれば、窮屈な印象が残ることになるでしょう。

発表と同時に、この元号は『万葉集』を典拠として考案されたと説明され、引用文が示されました。この部分、現在受け入れられている『万葉集』の写本ではこのように書かれています。

于時初春令月気淑風和梅披鏡前之粉蘭薫珮後之香（『万葉集』巻五・815～846番の歌に付けられた序の頭の部分）

読み下し文は「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」

（時はまさに新春の喜ばしい正月、あたりの気配も清く風はおだやかで、梅は鏡台の白粉のように白く咲き、蘭は香袋のように香っている）

これは、天平二年（730年）一月十三日に大宰帥（太宰府長官）大伴旅人邸の庭で催された宴で詠まれた32首の歌の序の一部で、この宴には山上憶良（筑前守）、小野老（太宰府次官）らも招かれています。

今回の元号ははじめて国書に典拠を求めたという点で大きな意義を持ちましたが、令と和とを詠み込んだ、賦という形式の文がもっと古い漢籍『文選』に収められており（張衡『帰田賦』）、万葉集の文はこれに基づいたものであろうとの意見も、すぐに話題に上りました。大伴旅人（軍事を担当する大伴氏の家長であった）であれ山上憶良（遣唐使でもあった）であれ、当時第一級の知識人であり、『文選』には精通していたでしょうから、これを「下敷き」にしたことはほぼ確かだと思われます。教養の表れとみるべきでしょう。

日本中が沸いた、と思われる新元号の発表でしたが、日本のことが報道されることの少ない外国でも、いまでは世界で唯一の元号使用国という珍しさもあり、ニュースの話題になりました。

もちろん、国内では、様々な観点に立った、さまざまな意見が各方面から出されています。天皇制を快く思わない人にとって元号はいまいましい道具に見えるでしょうし、思想とは関係なく、元号を用いることによる不便さを縷々述べる人もいます。これは不穏な意味をうちに秘めていると、穿った見方をする学者もいます。

それでも、新元号令和は、様々な礼賛、批判の声を抱えながら、新天皇の登場とともに力強い命を与えられ、これまでの元号と同じように、多くの日本人に親しまれ、なじんでいくことでしょう。

（散歩道）

世間の風評に煽られて、最近のベストセラー、『妻のトリセツ』（黒川伊保子編著）を読みました。中身は、世の賢明な夫達なら、言われずして既に実行されているであろう内容でしたが、それが脳科学に基づき論理的に説明されているのが面白い、というところでしょうか。

女性脳と男性脳はシステムが違うと筆者。妻の怒りの原因は、今現在起きた事件ではなく、過去の蓄積。些細な事でその引き金を引いてしまうと、過去三十年以上に渡る負の感情のデータが、まるで昨日の事のように新鮮な状態でとめどなく引きずり出せるのが女性脳の得意技。例えば「無神経」という言葉で検索をかけると、長年の「夫の無神経行為」が瞬時にサクサク浮かび上がり、何十発もの銃弾が夫に浴びせられ、夫は身に覚えがない（忘却、及び気づいていない）事で命を削られていくのだそうです。

特に、妻の周産期、授乳期は要注意。ホルモンバランスの変化や、たくさんの個体数を残せない、健康でないと子孫を残せないという哺乳類メスとしての本能で、自己保全に敏感になり日々満身創痍。その時期、妻の怨みを買い、夫が終生罵られる絶対禁句は「お袋がつわりは病気じゃないって言ってる」（お袋というのが特に×）、「楽なお産でよかったね」、「夜泣きに付き合っても昼間寝られるじゃん」、「一日中子供といられていいね」などなど。「そんなの何十年前の話だ」と夫諸君はお思いでしょうが、当時「やらかしてしまった」事が、現在の不遇を招いているのです。ぼんやりしていたら生き残れない！　家庭がのんびりくつろぐ癒しの場所などと笑止千万！　妻の「理不尽な不機嫌」の原因を知り、対処療法（銃弾十発を五発くらいに抑える）を指南してくれるのがこの「妻の取扱説明書」であり「プロの夫になる為の戦略本」なのだそうです。

こもりうた52

妻に対しこんなに手間暇かけて機嫌をとり、なおかつまだ積年の怨みを言われる。もう別れてしまった方が楽なのでは？　と思われる方。いやいや、それでも妻はいた方がいい。夫の健康寿命に影響するのだそうです。

東洋経済オンライン「なぜ『離婚男性』の病気死亡率が高いのか」によると、離別の男性はあらゆる疾患で死亡率が高く、特に糖尿病は妻がいる男性の10倍以上、肝疾患は8倍以上。さらに、内閣府の「心の支えとなる人」調査結果でも男性の78％が配偶者と答えているそうです。突然怒り出そうが、キレられようが、無視されようが、心身ともに妻を頼っているのかと思うと、なんと愛おしい夫達ではありませんか。

ちなみに残念なお知らせですが、「心の支えとなる人」の国際比較調査（5カ国）結果によれば、日本、韓国、アメリカ、ドイツ、スウェーデンの女性で配偶者を一位にあげた国はないのだそうです。女どもよ、ちょっと勝手が良すぎやしないか。。。

訶梨帝母

『私説法然伝』（５２）

陰謀術数①

先月号では吉水の地へ法然上人が移られたことについて書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法然上人が吉水の地で念佛の日々を送られ始めた頃、世情は再び不安定な状況となっていた。この時代の京の都はたびたび大火に見舞われていた。安元三年（一一七七年）の四月に起こった安元の大火が鴨長明の『方丈記』にも詳細に記されている。朱雀門や内裏の中心である太極殿や大学寮など公的な施設が焼け、公卿の館も焼けたとある。鴨長明によれば京の都の三分の一が灰燼に帰したという。延暦寺の僧徒・僧兵は強訴のために都へ乱入するなど、世情の不安定さは一目瞭然であった。

世情の不安定さに比例するように政情も不安定となっていく。平家政権の力が絶大になるにつれ、それに対する反発の輪が広がっていったのである。当時の平家政権の力の絶大さの中心となっていたのが、高倉帝の中宮となっていた平清盛の娘建礼門院徳子の存在である。高倉帝は後白河帝と清盛の義理の妹である建春門院滋子との子であり、その高倉帝の擁立が後白河院政の要である。そしてその高倉帝に娘を入内させる事が平家政権の要となっていたのである。

大火の前年の安元二年（一一七六年）後白河帝五十歳の祝いの行事の後に後白河帝は滋子と有馬温泉へと行幸する。それほど仲睦まじい二人であったが、その行幸から都へと戻ると滋子は病に倒れ三十五歳の若さで亡くなってしまう。これにより後白河帝と平清盛とを繋ぎ結んでいた要を失う事になった。利害関係という視点で言えば後白河帝と平家政権は本来的に対立関係である。それを結びつけていたのが、高倉帝の擁立であり建春門院滋子という調整役の存在であった。その一端が崩れると、パワーバランスの崩壊を招くことになった。延暦寺の僧徒・僧兵の乱入も意味なく行われたわけではない。その背景には後白河帝の近臣と延暦寺との対立がある。西光は出家した後の名で、元は藤原師光と言い信西入道の乳母の子であり信西入道の配下で名を上げた人物である。信西入道亡き後も後白河帝の近臣として仕えていた。その子である藤原師高・師経兄弟が延暦寺の末寺を焼き討ちにした事が発端となり、延暦寺と院の近臣との対立へと発展したのである。この対立構造に平家一門が巻き込まれる、または介入していく事で政情の不安定さが加速していくのである。】

『方丈記』に大火の詳細が記されています。当時の京都は相次ぐ大火や飢饉などで相当不安定な時代であったことでしょう。そんな時代と呼応するかのように政治の世界もまた不安定となっていくのです。

以下次号に続く（征阿）

鴨長明の庵

あんただれ？

「新しい元号は令和であります」と発表されるや典拠の『万葉集』が話題沸騰し、新一万円札の肖像が渋沢栄一と判るや『論語と算盤』の解説本のいくつかがアマゾンで在庫切れになりました。

五十代以上の人間にとって、お札の肖像といえば聖徳太子でした。昭和25年に千円札、32年に五千円札、33年に一万円札が発行されましたが、全部聖徳太子です。五百円札の肖像だけが岩倉具視でした。

ところが、太子の肖像は本人を描いていないと聞いて、教科書を買って読んでみました。（高校日本史B　実教出版）

（先生から）として「絵は小中学校の教科書にも登場する、聖徳太子（５７４～６２２）を描いたといわれている肖像画です。しかし、手にもっている笏やかぶっている冠は、ともに7世紀後半以降中国から伝わってきたものであることがわかっています。このことから、この肖像画は聖徳太子を描いたものではないという説があります」との記述です。

続けて、「『日本書紀』（７２０年成立）に、推古天皇の皇太子であり、摂政となった人物として登場するのは、厩戸皇子という人物です。聖徳太子という名前は、仏教を広めた聖人とされた厩戸皇子が、その死後、信仰の対象になっていくなかでひろまっていった名前なのです」と書いてあります。

つまり、推古天皇の摂政で聖徳太子という名の人は居らず、その肖像画のモデルは本人ではないと高校で教えているわけです。

初任給の月給袋の中に入っていたお札には聖徳太子と印刷されてありました。封を切らずに持って帰ったら、両親が佛壇へ具えてくれました。あれはなんだったの？

もうそんな旧い話は水に流しましょう。

問題は文部科学省です。小中学校で、太子が遣隋使を派遣したり、冠位十二階を定めたと指導せよとしながら、高校の教科書には、誰がそれをしたのかみんなで考えようと書いてある。もう一回学校へ行く気はないけど、歴史の授業では事実を教えるのと違うの？　ハッキリせんかい！

太子が当時の政治を動かしていた人物と断定できなくても、立派な方であったことは間違いありません。特に、四天王寺や法隆寺を建立して佛教を広め、日本佛教の祖として敬われる存在であることは事実です。

また、十七条憲法の第一条「和を以て貴しと為す」の本当の理解がなければ、戦後の復興は無かったと言われています。

俊徳丸さんは聖徳太子より厩戸皇子の名に親しみを感じておられるかも知れません。競馬場がある町の住職さんですから。私は元サラリーマンですから、多くの会社を設立した渋沢栄一のお札との対面が楽しみ。どちらも配当が気になります。　迷走坊

観経物語（１２９）

流通分（るずうぶん）その２

《本文》その２

佛、阿難に告げたまう。

「汝は好く是の語を持せよ。是の語を持せよとは、即ち是れ無量寿佛の名を持せよとなり」と。

佛、此の語を説く時、尊者の目犍連、阿難及び韋提希等は、佛の説く所を聞き、皆大いに歓喜す。

《意味・訳文》

佛は阿難に告げられた。

「お前はこの言葉をよく覚えて守り続けるがよい。この言葉をよく覚えて守り続けるということは、ほかでもなく無量寿佛の名を覚えて守り続けることである」と。

佛がこの言葉を述べられたとき、尊者と呼ばれ尊敬される阿羅漢の位に到った大目犍連や、出家した後は常に佛に従って教えを聞き、他の修行者に伝え続けた阿難や、在家の信者である韋提希夫人らは、佛の説かれたところを聞いて、みな歓喜の心をおぼえた。

《私訳》

佛が弟子第一の尊者と呼ばれるまで修行の進んだ大目犍連ではなく、佛に常に従って教えをよく聞いてはいるが未だに悟りには到っていない阿難を指名して「好くこの語を持せよ」と言われたのはなぜか。また、在家の信者で、いま苦しみを逃れる法を教えたまえと佛に懇願することによって、この経が説かれるきっかけを作った韋提希夫人でもなかったのはなぜか。考えてみれば、韋提希はこの経の要である「他力」「念佛」をすでにこの経の定善第七観のところで実体験していますから、念押しする必要はありません。阿難は大目犍連と共に「自力」の修行者です。努力精進すれば必ず悟りに到達出来ると思っています。そこで佛は、自力修行者はいつかは修行の限界にいたり、修行を捨てて他力に帰すであろうことを示唆して阿難に記憶させておこうとされたのでしょう。そのことは未来の修行者に伝えることであり、未来の韋提希夫人即ち未来の「凡夫」たちに伝えよ、ということです。なぜなら凡夫は出家もせず、戒も守れず、善行や修行もままならず、苦を被り、やがて悪道に堕ち、到底佛に至ることがないであろう、そのような今の私達にたいしてこの佛の語を伝えよ、佛の語を伝えるとは、この観経で明らかに示した佛の名、無量寿佛の名を持せよということです。つまるところ「南無阿弥陀佛」と称するより他に道がないことを伝えなさいとの指示なのです。

《妙星斎》